

鷺

峰

創刊号

鷺峰会発行

仏陀のことは

○自らを燈火とせよ、自らを燐依処

とせよ、他を燐依処とするなかれ。

法を燈火とせよ、法を燐依処とせ

よ、他を燐依処とするなかれ。

○仏子この地に住すれば、即ち是れ

仏、愛用したもう。常にその中にま

しまして修行し若は坐臥したまわん

目次 驚峰 創刊号

○平和の祈り 四人の行脚世界を動かす …… 2

○信脚 体験 我が唱導師 …… 8

○身延・東京 行脚記 (2) …… 17

○幸せでありたい …… 19

○教学ノート 興門初期の本尊意識へ2 …… 11

表紙題字

身延山久遠寺
オ八六世法主

藤井 白 静 祝下

平和の祈り

四人の行脚 世界を動かす

へ広島・アイシユピッツ平和行進団の概況に因んで

【一】

沢田寛 著

身正山街跡布教の偉大なる

そこで来るべき冬休みには京都・奈良方

隊果は、早くも米門周知の事

面の行脚布教が、再び我等学生有志の間に

突となってをり、また身正山大学・高校

立案されているが、然しこうした行脚布

の学生有志教名が、暑中休暇を利用して、教に対して、

衆相身正入山の聖路をたどりながら、身

「それは愚の骨頂だ、文通被阿も発着、

近・東京岡七十余里を撃鼓行脚したこと

し、宇宙ロケットも打上げられている女

は、沿道多大な肝銘を与えると共に、そ

明の時代に太鼓を打ちながらテクテク歩

の紀行文が白蓮宗新聞に連載されること

く行脚布教なんて時代錯誤も甚しい」。

によって、広く米門の関心を集めている

と嘲う者も中にはいるかも知れない。

一身延山法主祝下もこの壮舉をたゞえて
金一封を贈られた。

爆燐の写真帖及び同フィルム、映機、
同じく被爆した石、器具等の現物、人形

然し出発時に集計された資金は僅か八

芝居の道具等々。

十万円、一人分の金額にも充たない。然
し一行は、前途に一命にかゝる競争が
あることも辞せない決意に燃えていたの
である。

行進団は香港を至てシンガポールに上
陸、まず市長に会見、無名戦死者の墓地
に詣で、次いで平和大会を催して戦争反
対、原水爆禁止の叫びを放ち、これよ

半年にわたる準備を経て今年の二月六
日、一行は広島を基拠として壮遊につい
た。日本各地を廻り横浜を出航したのは
四月二十三日のことである。携帯したも
のはウチワ太鼓にタイプライター、広島
市長の各地へ送る平和メッセージ、広島

り提供されたジーフでマレー半島を従断
クワラルンプール、サイゴン、バンコッ
クを至てラングーンに入った。ビルマで
は大東亜戦争で戦死した将兵の白骨が未
だ原野に放置累積されているのを葬り、
忍親平等の法要を営んだことは毎日新聞

に報道された通りである。

大であったことが物語られている。

一行がビルマより東バキスタンを経て

一行はボンベイよりセイロンへ渡り、

インドの門戸、カルカッタより日蓮宗新

大統領との会見後、二週間にわたってセ

蘭既報の如き六月十六日より原水爆禁止

イロン平和委員会と共に各地に大会を用

世界平和大会に参加・ネール首相との会

き、再びインドへ戻り、九月十四日西バ

見後、インド大臣を縦断無尽に走馳する

キスタンへ入国。目下ラホールからカラ

こと一万二千キロ、殆ど連日の如く平和

チを経てイスラエルに向って行進を続け

集会を催し、又署名運動協力の数に突に

ている。

五千万人の多きにのぼった。

【 3 】

一行僅か四名の着が、二ヶ月余の短期

一行が日本を出発してより僅か半年、

日の中に、かゝる大成果をあげたことは

この岡インド・セイロン・東南アジア諸

警異的という他はないが、これには一行

國を巡った行進団の行動は、遂次各國の

の熱誠とインド各地の指導者の協力が絶

大新聞紙上より一面に報道され、就中イン

ド・セイロンに於ては、乞われて平和の
叫びがラジオを通して放送されてをり、
またこれより赴くイスラエルでは、その
国が戦後独立したユダヤ人の新国家であ
り、戦時中数百万の同胞がドイツナチス
に虐殺された生々しい体験を持つだけに
、国家的行事として一行を迎える準備を
している。

更にまたポーランドに於てはワルシワ
のアイシュビッツ国際委員会が、一行の
到着と同時に、一行と交代し、アイシュ
ビッツを基拠として広島へ向う平和行進
が企画準備されている。

佐藤團長は四十代の壮年にしても、他
の三名は皆、大學生在校中の学生にすぎな
い。しかも行く所くすべて未知の國、
未知の土地、そして未知の人々ばかりで
ある。舌鋒はもちろん、風俗習慣も異な
っている。それらあらゆる困難の中にあ
つて、かくも宗教成果をあげ得たことは
彼等一心の祈りの真剣さに基づいている
。連日休む暇もなく國家指揮者と会見
し、教干の大家に平和を説き、映画・人
形芝居をし、或いは地方青年、都市大学
生と座談会を開いては、次の目的地へと
行進して来た。文字通り不惜身命という

ほかない。

インドを立ってポーランドの最終地帯に着くまで、あと何万キロという里程がある。然し彼等は日本人の誇りと、平和

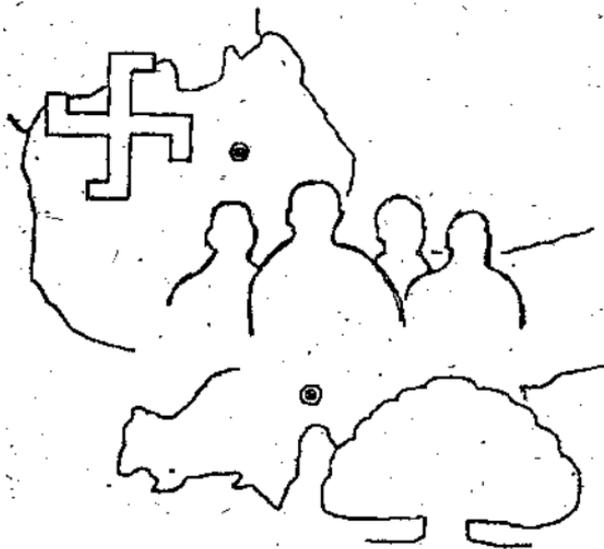
者の義務に於て最後まで努力し続けるであらう。

私産は、この四名の行脚行進に対して心から祝福を送ると共に、この一例をもつてしても自からの行脚布教に確信をもつのである。

そして、こうした布教が身延山を基として四人、或いは教人と隊を組み、幾組でも全国各地に随時随所を展開されてゆ

く時、かゝる地道な布教を底辺として、身延山を頂埃とした大日蓮宗が世界に向って建設されることであらう。

了



信 仰 体 験 わ が 唱 導 師

川 島 一 郎

私は幼ない時から人一倍はながった。だいいち、先生が何かを聞
の弱虫であり、人見知りであつた。他人がこわく、な
あつた。他人がこわく、な
とむことができず、大勢の
人の前へ出るととてもしん
ぼうしきれないで、ワァー
と泣く。

はながった。だいいち、先生が何かを聞
くので競争をしなければならぬ。それ
がどうにもはぶかしいし、おまけに大勢
の子供が皆こわい。それで母は私と一緒に
に学校し教室の片すみに隠すいた。いな
ければ人目がまわすワァーとやるかうで
ある。

その頃、私の家は岡山県
備中の片いなかに疎開して、
幼稚園・小学校は一里も離
水た町中にあつた。遠いだ
けでなく私には幼稚園や学
校がとてもやりきれない所であつた。

小学校も二年になるとどうやら一人を
学校へ行けるようになったが、帰り道に
獅子舞いでもいようものなら遠回りとし、
遠くの山火争をみてはまたワァーと泣い
た。

疎開先から都会にもどつてからも、他

人がこわく人の沢山いる学校がいやで、
休みが待ち遠しい。弱虫根性は倒産直り
そうもなかつた。

こんな過去が現在、親元を離れ人
様と相手の宗教家を志しているのだから
不思議でならない。身延へ来る前の自分
は宗教家とは、大変おとなしいものだ
思っていた。しかし、私の幼稚な観念と
は正反対に宗教家は行動を矛一としなけ

祖父は私の出生前に死去したが、私に
は信仰深い祖母がいた。まともに話ので
きない小さなころから、私に御題目を唱
えさせた。朝な、夕なに仏前で十遍・二
十遍、南無妙法蓮華経を繰り返す。歯を
磨き顔を洗う様に簡単なことだから別に
疑いもせず曰課となっていました。事情
とは恐しいものである。以来十年近くと
私は続けられた。

これはならないことを知った。だが今の自
分はそ私が当然で、自力もそつでなければ
はならぬと思い、そのために努力するの

今考へるに、私の信仰は祖母に御題目
を教へられたその時から始まる。たのび
なひろつか。信仰とは考へるものではな
い。無理に理解を知って実行するので

もない。お題目を唱えることそのものが、とである。その人の唱える御題目が、その行動とそれ自体が信仰なのである。世の人の信仰生活が正しく清純ならばそれの人々は信仰をむすびしく考える。確かで良いのである。真心があるならば必ず何らかの知識は必要だ。しかし童心で神仙に通ずるはずである。

唱えた御題目ほど清純なものがあろうか。こんな訳で私にとって、祖母は唯一人現在社会には何々会と称する新興教団の唱導師であり、お影で自分は正法を受が沢山ある。これに対して模倣教団や寺院は何かと己れの優位を示さんとして、論争を企てる。又新興教団同士でも論争

のはてに暴力沙汰にまでなうて分裂をはとめる。しかし常に考えなくてはならないことは、その会の行動をもつてその会を祈りたい。

願まどやかく言つてはならないといふ

興門初期の本尊意識

その二

— 学生諸氏の教學の資料として —

大場 玄晃

初めて本誌を御覧になるおのために、
最初に前回記載いたしました原稿の要旨
士は同一体の表現與と見られてゐる事を
のり抽出しておきます。

先回は興師の本尊觀を窺うに最も信憑
性のある文献資料として、恐らく真疑の
論を生じ得ないと思われれる消息文につい
て、その真意を説明せんとこのころみた。
尊を實現するか否かは経路上の堪不堪に

せしてその結果として興師は明かに仏本
尊論者であり、勸請形式の上からは大曼
相であり、三類の強敵充滿する故、

に擇りがあつてはいかんとするのが興師 門徒存知等し等の文献を引用しないのは
 の真意と擇せられ、そこには今日大石寺 何故かという非難もあると思われるので、
 門流でいう如き教義上の理由は全く見い 次下この二書について稿をすすめてみよ
 出されないのである。

以上は興師の特に消息文を中心に考察 ます「五人所破抄」について、内容よ
 したのであるが、尚因みに興師の仙本尊 り見るに古来衆説区々であるが、華法寺
 論者たるを証し得る資料として、引導抄 の日頃の如きも、この書を直ちに興師の
 決の「臨、靈地、心持大曼荼羅、奉向……可、ものとは見ず、日代とも日頃の筆迹とも
 念仏身也」また「曼荼羅……是釈迦法 いってわり、今日一般には日頃の作とす
 王印判、云意也」の二文を挙げて置こう。 るに意見が一致してゐる様である。また
 所でこの論証で、限られた特定の文献 「門徒存知事」にして興師を去る事違
 のみを挙げて、古来興師の書として間違 くはなくとも興師自身のものとは考之に
 はなく伝へられてきた「五人所破抄」の くいのである。

所々今兩者に表出たる本尊意識を考察 羅紙質本尊の正意なることを仄かして
して見るに、「五人所破抄」に於ては する。即ち、「日興云於聖人御立法門全
「日興云、諸仏之在位雖同依印契而辨異、以繪像不依仏菩薩、不為本尊、唯任御書意、
如來之本迹難測、以着屬而知之……此外 以妙法蓮華經五字可為本尊、即自筆本尊是
一体之形像豈非頭陀之施身哉」と要す也」とある。然し本抄とては日興に依
るに仏格の本迹を規定するものは、印契 しては形像本尊と全く否定しているわけ
であり、着屬によるものであるとの意で、ではない。本抄の追加の分には、「近年
その主体は仏本尊であり、宗相所持の隨 以来日興所立義盜取為己身」とあり、
身仏については「継子一旦之靈愛待月 その流きの文意より、明かに「日興の身
片時望光歎」と難ざるも、四菩薩を添 したは一尊四士本尊であり、形像本尊を
えた一尊四士形像本尊は是認しているの 全面的に否定しているのでない意味が察
みられる。こ水が「門徒存知等」にくる せり水はう。

と、明らかに形像本尊を否定し、大書系

15 圖書に於てこ水と尋するに「五人所破

妙しに於ては大曼荼羅所顯の仏格と法仏
ないし一体仏との勝劣が論ぜられてゐる
のであり、その法体は仏と主体とするの
である。また「門徒存知事」に於ても「
以妙法蓮華經五字可爲本尊」の妙法五字
とは、興師の消息文、發願書にいう所の
「南無妙法蓮華經教主釈尊久遠東成ノ如
来」と同一意と見て誤りなき者とすれば、
仏本尊の資格を逸脱するものでは決して

思文より「五人所破抄」が、更に「五人
所破抄」より「門徒存知事」がという段
階を過つて、形像一尊四士本尊より總賢
曼荼羅本尊に暫時に遷位が置かれる史實
が明らかに見えるのである。即ち大曼
荼羅と一尊四士が同一主体の表現異であ
るといふ考へより、両者の間に主体上の
法体上の懸差が論ぜられる様にするので
ある。

ないのである。以上より見て少くとも
興師の信頼し得べき文献による限り、法
本尊の思想も宗祖本仏思想も全くみられ
ないのである。また表現形式に於ては消

所で「門徒存知事」の中に、「此興師
御本尊は一閻浮提、水洑布、正像末、未弘道
本尊せ……是像、広宣流布時、本化國
王御尊有ラン期マテ深敬重シ奉ルベシ」

曼荼羅の略と思われる。

次回文献をあけて詳しく説明するが、
要するにニ尊四士本尊形態が本宗に於いて
広く建立せられるようになったのは大
聖人滅後六〇年以後のことであり、一尊
四士形態の方が更に古い形式であること
は否定しがたい事実である事を略説して
おこう。

種



献香 献華の歌

立正の教と華き此の團に

集へる我等まごころこめて

薫りもゆかし此の香と

やさしく咲ける此の華を

み仏に献げて限りなき

妙法のひかり仰ぎ讃へん



身延↓東京

行脚記 二

石川 兼治

たせうです。氏が釈尊の徳をいわれるように、仏の偉大なる力が働いて、お水は實際不可能な大奇業であり、私はこの淨行に感嘆せずにはいられませんでした。

夕刻、御殿場駅前にて獅子吼しました。

〇七月廿一日（晴）

沼津の妙海寺を後に我々は均熱の御殿

〇七月廿二日（晴）

場街道を遡った。三徳食品会社々長堀内

堀内社長のお家を経て、いよいよ

貞良氏の出迎をを受け、仏舎利塔に詣、足柄峠へ。堀内氏一行と一諸に警護して

で、身延から携えてきた七百七字の題詞

下せしました。

石を仏舎利塔内に納めました。この仏舎

宗祖の靈跡竹ノ下を経て、足柄街道を

利塔は堀内氏が登壇され、全社員が奉仕

通過、足柄峠に着いたのは十時頃度。昨

して、工事は種々と進み来春完成の手筈

の格差を昼食し、堀内氏と別水、宗祖の

幸せでありたい

佐々木友学

あなたも若し今「生きていくことが本当に幸せといい切れますか？」と尋ねられたら何と答えますか？

少しでも幸せでありたい、毎日幸せに生きたい……。誰しもの願いであり、又その願いがあれば、生きていくのであります。

私達はそれぞれに、その人なりに生きているのであろうけれども、やっと思いたく、幸せと喜びのどっかの間に、思い切り壁

にぶつけられた様に苦痛と哀嘆の中にいやという程に遠いこま水たり、信じ切っていたことが一朝一夜に裏切られたり、

どうしようもない苦しみから抜け出るこゝとが出来なかつたり、多々にして私達の毎日の生活は苦しい方が多いし、幸せと感ずる間の方が少ないのが事実であり、現実であるがこしれない。

幸せを知るには私達の苦しみを知る方が早いかも知れない。ある人は長い苦しみの間に生きてくこと喜び即ち幸せが得られることができると教えて下さったが、私達はやはり毎日が幸せに生きていることが

なすまでこそ本当の幸せはなすまいか、
ある人の叶に与えらるる幸せ、ある人
にのみ与えらるる幸せでなく、生きる
全ての人が、いかなる境遇にあつても
必得られる幸せ、誰にでも共通し、しか
も身近に得らる、互に分ちあへる幸せ、
そして永遠性のある幸せがあるはずであ
ると信ずる。

誰しも両親に生んで下されと頼んで生
れて来たものではない。生れて来たから
には少しも生きることの意義を求めない。
生きていくこと、老いたること、病め

ることで、にくみ合うこと、求めるものが
思つように得らるるということ、その位なら
べるならば苦しみは癒えない。生れてき
たからには悲しい宿命を背あつてゐるの
だつて、苦しみを確かに誰にでもさけ
られるものではない。苦しみ、又個人的
な宿命であつて、さつしたもののからの
が水たり離れたりすることが幸せである
かに思える。しかし本当の幸せを得るに
は、さつした苦しみが最も大切なので
あると受けとれるとき、この苦しみの中
に、私達は苦しみと共に、幸せを発見し、
得ることが出来るのではないだろうか。

併合発刊によせて

編者代表記

●幾十万人々を殺戮し、今もその傷跡
まどどめる広島・長崎に投下され小に原爆
つに分けられ、為政者はお互いを憎み、
争が如何に悲惨なものであるかを身に味
におののいてける。

わった日本人は、戦争に依る幾多の悲し
み苦しみを二度と繰り返さぬ様に、もし
て世界平和を確立すべく戦争放棄を誓っ
た筈だ。しかしそれから十数年を経た今
日、地球上の各所にいつ爆發するやと知
れぬ戦争の種がばらまかれ、イデオロギ
ーの異なる国の対立によって、世界は三
つに分けられ、為政者はお互いを憎み、
争が如何に悲惨なものであるかを身に味
におののいてける。

●これこそまさに仏陀世尊の予言するこ
ころの末法の実体ではなからうか。今日
の不安と恐怖の中で落ち着きを失った日
本生活の中において、我々は立正安國・
世界平和の旗印の下に集まり、喝應をも
って身を清め、人類絶滅の悲劇を救うべ

く平和社会の實現に盡さうではないか。

法華経の眞隨に隨順、自己の仏性を顕発

●欲望のかたまりである人間は己の平和なることの目を翳し、しかし国家社会の平和を祈らざして何で己の平和を得られよう！法華経は他人の平和を祈る心

し、衆生の説く慈悲と愛に充ち溢れた世界を實現する、更に、人類の救済を目的として生きる決意のもとに、鷲峰会を結成した。

によって己の平和を得ると説く。他人の平和を祈る心こそ神仙に通じ、己の平和を祈るのである。

●鷲峰とは釈尊一大説法の地、靈鷲山を意味し、また曰蓮聖人の言われる本朝の靈鷲山身延をも意味する。即ち自我偈の

●この時代に未来を担う青年の任務は重

「但出靈鷲山」はこれである。

大である。仏陀世尊の教えを受け、曰蓮聖人の行法を体得せんと志さず我々にとって、今日の世相は最大の試練とも言うべきものである。こころした世相の中で、

●鷲峰会の誕生により、これまでの「おんげし・鐘音」の両小誌を併合し「鷲峰」と改題してそのカーズをここに発行した。

後記

立冬向寒の候、皆々様には御障りなく益々御精励の由と存じ申上げます。

我々一同、何分にも修学途上にある若輩の身、皆々様の御指導、御鞭撻を切に御願ひ申上げ、今後の我々を見守って下さることを重ね御願ひ申上げます。

鷲峰々々々目次

氏名・学年・出身地

- | | | | | |
|-----|---|---|----|-----|
| 沢田 | 寛 | 象 | 学二 | 福地山 |
| 藤森 | 英 | 一 | 学二 | 松本市 |
| 小寺 | 完 | 元 | 学二 | 熊本市 |
| 高取 | 晃 | | 学二 | 神戸市 |
| 匠々木 | 反 | 字 | 学一 | 名古屋 |
| 川島 | 本 | 良 | 学一 | 神戸 |
| 小林 | 藤 | 恒 | 学一 | 福岡 |

今故「錯音」「れんげ」を併合して、「鷲峰」と改題し、異体同心、弘法精進を誓う本山在院学生有志の結集のもとに発行されることになりました。

皆々様からの多大なる御援助、励ましの御言葉と賜り鷲峰会員一同、本誌発行のみにとどまることなく、実践行動と共に皆々様の御期待に添える、精進を信条としていきます。

早坂本勝学一 仙台市
 谷口正親学一 長崎市
 宮下鎮基学一 東京
 田素行明学一 靜岡
 深沢保学一 靜岡
 藤原成憲学一 奈良
 川本龍祥学一 島根
 法々堂見英学一 石川
 福山忠司学一 福岡
 石橋隆高三 靜岡
 井前本猛高三 石川
 花田茂八郎高三 福岡
 石川義治高三 福岡

爾宮文敏高三 山梨

小田恭博高三 新潟

清水信和高一 足利市

鈴木晃慈高三 長野

藤田利治高三 弘前市

地方会員

武村英伸 広島市

鷲峰 創刊号

昭和廿七年十一月十五日 発行

編集・印刷・発行 鷲峰会

山梨県南巨野郡身延町久遠寺内